

土岐善麿と中国の文学者との交流について

小田切 文洋^{*1}

About exchanges between Toki Zenmaro and Chinese literary men

Fumihiro OTAGIRI^{*1}

In this paper, I will examine the exchanges between Toki Zenmaro and three Chinese literary men, Feng Zhi (馮至), Li Mang (李芒) and Guo Moruo (郭沫若). Toki Zenmaro, through exchanges with these Chinese literary men, deepened the understanding of China and Chinese literature. In this paper, I will try to survey the art works and researches of Toki Zenmaro, focusing on his creative activities.

1925年に漢詩和訳集『UGUISU no TAMAGO』を出版して以来、土岐善麿は生涯にわたって中国古典文学に関心を持ち続けてきた。なかでも関心の中心にあったのは杜甫である。杜甫の探求を進める中で、現代中国の文学者との新たな機縁も生まれている。土岐善麿は、1960年、1964年、1973年と三度、訪中団団長として新中国を訪れている。訪問の性格はそれぞれに違うが、訪問のたびに中国の文学者たちとの交流を深めている。本稿では、馮至、歐陽予倩、李芒、郭沫若ら中国の文学者との交流について資料を整理していきたい。

—

土岐善麿は69歳になった1954年から、嵯峨寛や真田但馬らとともに「杜甫を読む会」を始めている。若い人たちと輪読を進めながら、解釈の基礎となる訳稿がまとめられていった。最初の成果として出されたのは、翌年の11月に刊行された『新訳杜甫詩選』(春秋社)である。この後『新訳杜甫詩選』の書名で第四まで刊行されていく。それら四冊を再編集して『新訳杜甫』(光風社書店)が刊行されたのは、85歳になった1970年である。「杜

甫を読みひそかに思ふ 人間が詩をつくることの意義とちからを」「石」『額田抄』(初音書房、1960年12月)、「一千年 たがい時に時を隔てたる大陸の詩人と いまともにあり」「斜面荘近事」『十方抄』(短歌新聞社、1971年1月)などの作からも土岐善麿が杜甫へ深い共感と関心を持ち続けていたことが知られる。土岐善麿の杜甫研究が素人的な関心に終わらなかったことは、清代までの注釈や詩論ばかりでなく、新中国になってからの新しい杜甫研究にも目が向けられていたことから理解される。

吳中勝『杜甫批評史』(中国社会科学出版社、2012年4月、中国語の文献は原書・原文の表記に従う)によれば、新中国成立後の杜甫批評を代表するのが、馮至『杜甫傳』(人民文学出版社、1952年11月)と郭沫若『李白与杜甫』(人文学出版社、1971年10月)である。この二冊は、一方が建国期の50年代、もう一方が文革期の70年代とそれぞれの時期の政治状況を反映していて対照的な性格となっている。馮至が杜甫の人民性・現実性を肯定的に描いているのに対して、郭沫若は杜甫の階級意識や地主生活など封建思想を剔抉し、人民詩人としての杜甫を否定している。

*1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Professor, Department of Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

1950年代には、蕭滌非『杜甫研究』（山東人民出版社、1956年6月）、傅庚生『杜甫詩論』（上海文藝聯合出版社、1954年12月）など杜甫研究の重要な著作が出版されているが、その中でも注目されたのは馮至の『杜甫伝』である。馮至（本名は、馮承植）は、『北遊』1929年、『十四行詩』1942年などの文学的香気の高い詩集で知られる、中国近代詩の重要な詩人である（詩人馮至については、秋吉久紀訳編『馮至詩集』土曜美術社、1989年11月や佐藤普美子『彼此往來の詩学—馮至と中国現代詩学』汲古書院、2011年2月などの研究・翻訳がある）。馮至が杜甫伝を書いた動機は、「這部傳記的目的是我們祖國第八世紀一個偉大的詩人介紹給讀者，讓他和我們接近，讓我們認識他的時代裏是怎樣生活、怎樣奮鬥、怎樣發展、怎樣制作，並且在他的作品裏反映了些什麼事物。」（前掲『杜甫傳』、1頁）という前書きの一文に明らかである。杜甫がどのように生活し奮闘したのか、またどのように発展し制作していったのか、その作品のうちにはどのような事物が反映されているのかを現代の読者に身近なものとするために書かれたのである（杜甫研究史における、馮至の研究の位置づけについては、張迎勝《馮至先生的杜甫研究》、《杜甫研究學刊》2001年第3期・趙睿才《華路藍縷，以啟山林—馮至先生的杜甫研究》、《杜甫研究學刊》2006年第3期などの論がある）。

土岐善麿が馮至の著作に早くから注目していたことは、前述の『新訳杜甫詩選』の中で、「杜甫一代の名作とされ」た「秋興八首」の「昔と今と、中国における評価の変遷を考えるうえから参考になる」として、馮至の新説をかなり長く引いていることから分かる（136～137頁）。1957年12月に刊行された『新訳杜甫詩選 第二』でも、肅宗から遠ざけられ出かけた旅から生れた「北征」の創作の経緯について、馮至の『杜甫伝』が詳しいとして、論旨を要約しながら詳細な紹介をしている（57～62頁、原書では、68～71頁）。このような新中国を印象づけるような杜甫の新しい伝記研究への関心が1960年の中国訪問時に馮至との会見を実現させることになる。視察の目的から当初は考えていなかった、馮至との会見が思いがけず実現したことは、「われわれが北京へ着いて、文字

改革視察の目的を果たすために会見すべき当事者や見学すべき方面についての打ち合わせをおこなったとき、一行のうちで特に逢いたい人たちがあつたら、その名を申し出ておくようにといわれたので、各自にそのリストを作った。ぼくは、馮至先生と蔣兆和先生にもおめにかかれたら、さいわいである旨を申し入れておいた。馮氏は北京大学の教授で、『馮至傳』、『杜甫詩選』の著述があり、蔣氏は齊白石翁生存中から、すでに中国画壇一方の重鎮として知られている。その杜甫像にぼくは、傅庚生『杜甫詩論』の中で接し、この推重すべき一幅のごときを、もし書齋の壁間にかかげることができたら、と思っていたのである。（傅氏は西安に住んでいられるということで、面会は断念せざるをえなかった。）『杜甫草堂記』（春秋社、1962年8月、184～185頁）と、土岐善麿自身が書いているとおりである。

1960年の中国文字改革学術視察団団長としての中国訪問については、その背景と歴史的な意義を中心に、拙稿「土岐善麿の初回の中国訪問をめぐって」（『日語教育と日本文学』2013年第3輯）で検討した。北京で馮至と会談できた感動は、『四月抄』（東峰出版、1963年2月）に収められた、

杜甫のため酒会の席に乾杯す 蔣兆和画伯
と馮至教授と

『杜甫伝』も『杜甫詩選』もすでに読みたりと
語れば われの訳書をみしという
特装本に署名してみずからわたされつ 若
竹さやぐ北京大学の庭

という旅行詠からも伝わってくる。1956年に人民文学出版社から刊行された『杜甫詩選』は、馮至が選詩をし、浦江清と吳天五が注を施したものである。馮至から贈られた同書を、成都で夜遅くまで読んだ一夜のことを、土岐善麿は後日懐かしく振り返っている（前掲『杜甫草堂記』、159頁）。

馮至との会見の忘れ難い印象は、杜甫について最後に出した本である『新訳 杜甫』の中でも繰り返し書かれている。

すぐれた杜甫伝の著者として知られる馮至氏は、詩聖における最終的苦難の生活状況を小説ふうのものにまとめ、「白髮間生黒一絲」と題し、一九六二年「人民文学」の

四月号に発表されたが、それは杜甫生誕一千二百五十周年を記念する詩人教授の創作とみられ、その二月には、詩聖の悲劇的一生における「一種樂觀主義精神」についても、短い論考を「人民日報」に寄せられた。いまそれらを読みかえして、そぞろに一九六〇年の春四月、北京大学で初対面のき、静かに構内を案内されたのち、別れぎに、『杜甫詩選』の特製版に署名したのを「俗書ですが……」と、学者らしくいって贈られたことも忘れ難い。（「そえがき」、400頁）

文中の「白髪間生黒絲」は、武人といえる蘇渙との交流を通して、多病がちの晩年の杜甫が精神的に若返っていくさまを描いた作品である。創作のきっかけとなったと土岐善麿が推測している杜甫の生誕行事で馮至は「紀念偉大的詩人杜甫」という報告を行っており、翌年この記念行事に合わせて中華書局から刊行された『杜甫研究論文集 三輯』にこの原稿が収められている。封建勢力からの圧迫や貧病に苦しめられた人生であったのにも関わらず、杜甫が決して現実逃避をしなかったのは、その樂觀精神からだと言った短い一篇は、「人間要好詩」と題するもので、前者の創作は『馮至全集第三卷 山水 伍子胥』（河北教育出版社，12月，454～466頁）、後者の小論は『馮至全集第六卷 杜甫傳詩与遺產』（河北教育出版社，12月，155～159頁）にそれぞれ収められている（土岐善麿「老学生手記」『斜面相問抄』（光風社書店，1978年）では、会見時の忘れ難い印象とともに、先生の杜甫の家を訪ねられなかった弟子と、靴一足を川岸に残して杜甫が万山の奥深くに分け入って姿を消したという杜甫をめぐる二つの故事を通して杜甫と人々との関わり方を示唆的に詠んだ馮至の『西郊集』「旧的和新的故事」中の一詩「杜甫」にも触れている。

人民詩人としての杜甫の評価は、北京での歐陽予倩らとの交流からも実感されたことであった。土岐善麿は歐陽予倩から、

艸堂新構對芳春 杜老當年歷苦辛 借問而今誰繼武 工農憶萬盡詩人

という自作の詩を贈られ、誰かに継ぐという「武

は、軍国主義のそれではなく、「おそらく詩経の毛伝にいう「迹」のことであろう」との感想を持つ体験もしている（前掲『杜甫草堂記』，34～36頁）。これは、『詩経』大雅に「下武」の詩篇があるのを記憶していたからである。「毛序」には「下武繼文也」とある。杜甫の「詩人的な希望の夢」を人民の現実の生活の上に実現していこうという中国社会の意志のようなものを歐陽予倩の詩から感じたのであろう。歐陽予倩は谷崎潤一郎とも交流のあった劇作家で、京劇の舞台にも立った役者でもあった（谷崎は「歐陽予倩君の長詩」「旧友歐陽予倩君を憶う」で二人の交流を書いている）。現実の中国の地を踏み、馮至や歐陽予倩らと交流し、杜甫への思いとともに理解もまた深まっていったことはその後の土岐善麿の研鑽を見ても理解できる。

二

土岐善麿の本格的な紹介とまとまった翻訳を行ったのは、日本文学研究家で翻訳家であった李芒である。李芒と土岐善麿の交友を見ていく前に、まず李芒の略歴を確認しておく。李芒が自らの経歴に触れた文章として、李芒著 水谷誠訳「日本文学研究述懐」『日本文学』（第29巻第9号，1980年9月）がある。

李芒は、1920年撫順市に生まれる。9歳の頃、6ヶ月ほど私塾で毛詩の暗唱をさせられ、それが後年の古典詩歌愛好へとつながっていく。撫順炭鉱付設の小学校と奉天鉄路学院機務専修科で六年ほど日本語の教育を受け日本語の基礎を作った。日本文学や中国文学、またヨーロッパ文学の日中の翻訳に親しみながら、1940年頃から中国語で詩歌や短編小説などを発表するようになる。1944年には、満州映画協会に入り台本作成の勉強をする。1945年、革命に参加、新中国成立後、1952年に創刊された外国文学雑誌『訳文』に日本文学の翻訳紹介を始める。1970代までは、中国の政治事情を反映して、プロレタリア文学を中心に、徳永直『没有太陽的街』（人民文学出版社，1958年9月）、『徳永直選集』（人民文学出版社，1959年11月）、『黒島傳治短篇小説選』（上海文艺出版社，1962年

6月), 堀田善卫『鬼无鬼島』(作家出版社, 1963年4月, 1章から9章まで, 以下は, 文潔若訳), 小林多喜二『在外地主』(人民文学出版社, 1973年10月)などを翻訳している。1980年代以降は詩歌が中心となっていき、『万叶集選選』(人民文学出版社, 1988年10月)のほか, 「奥州小路」李芒・黎续德主编『日本散文精品 詠物卷』(云南人民出版社, 1999年6月), 『山头火俳句集』(浙江文艺出版社, 1991年9月), 『金子兜太俳句选译』(译林出版社, 1995年8月, 「和歌俳句丛书」中の一冊)など俳句の翻訳を多く手がけている。和歌・俳句についての翻訳論も含め, 作家論を中心に日本文学研究をまとめた『投石集 日本文学古今談』(海峡文艺出版社, 1987年12月)と『采玉集』(译林出版社, 2000年5月)の二冊の論文集を出して、李芒の研究業績の全体像が掴める。

李芒は, 「和歌汉译问题小议」『日语学习与研究』(1979年第1期, 同年3月)で, 和歌の漢訳について問題提起をし, この後, 賛否両論の論文が続いた。この論文で李芒が主張していることは, 「译歌句数和字数, 难以要求一律, 宜从原歌出发, 使用七言(一般多用于译长歌)五言、四言和长短句等多样化的形式。一个总的精神则是, 不论使用任何形式进行翻译, 表达都要力求接近原歌, 力求简练, 除非不得已时, 绝不轻易变通, 绝不外加词语, 或减少原歌的内容。」と, 翻訳に当たって句数と字数を一律には考えず, 表現を原歌の内容にできるだけ近づけるべきだということである。口語自由詩の詩型は考えていないので, 古典語の風格を失わずに原歌にふさわしい定型を見定めて訳出するというのが基本的な考えである(日本古典詩歌の翻訳は, 白話(口語)訳は少なく, 文語(文言)訳が主流で, 詩型とリズムをどう選ぶかで議論がされてきた, 金中《日本詩歌翻译论》北京大学出版社, 2014版を参考)。

土岐善麿は, 杜詩の現代中国語による翻訳が詩的な感性に欠けることを指摘した上で, 「日本語としては, 杜甫とおよそ時代を同じくする, いわゆる古典語があって, それは万葉集や古事記などに使われ, 文献としても今日も読むことができる。一種の錯覚的な仮説を取れば, もし万葉人が, 杜甫と同じような対象, 題材, 心情を表現とする

としたら, 一もちろん, その全部ではないが, 一記紀の歌謡, 万葉集のことばと, 韻律的構成とによるかもしれない(「あとがき—中国の詩の日本的な読みかたと訳しかたについて—」『新訳杜甫詩選』223~234頁)と述べているので, これは日中の古典詩の双方の古典語による移し替えという共通の出発点に立っているということができる。

この「小議」の中で李芒は自らの翻訳の実践例として, 土岐善麿の「いのちありて三たび北京の大地を踏む春きさらぎの風も寒からず」(『いのちありて』(大法輪閣, 1975年6月)の作を「有余年, 北京大地三番踏, 二月春风不觉寒。」と訳出している(初句は, 年画のおめでたい言葉「连年有鱼(=余)」を連想させるので後に「得永年」と改めている(前掲『投石集』「前言」参照))。この漢訳を土岐善麿が目にしていたことは, 「わが歌をかくも自在に訳したる 知己の大陸にありしと知らず」(『周辺』第8巻第4号, 1979年12月)の作から知られる。李芒自身も土岐善麿に関心を寄せていたが, 二人の対面が実現するのは1979年である。この年, 中国社会科学院訪日代表団の一行として李芒は日本を訪れている。日本滞在中は, 中国における日本文学の研究や翻訳について講演会や座談会を行なっている。この時の体験を踏まえ, 前述の和歌漢訳について問題提起をした一文が草されるのである。座談会の記録として, 岡田袈裟男記「李芒先生歓迎座談会—中国における日本文学研究の現状」『古代研究』(第10号, 1979年9月)があり, 座談会の後半では短歌や俳句の翻訳について自説を発表している松浦友久も加わり議論が交わされている。

李芒は, 日本滞在中に「日本文学在中国的翻訳和評價」と題する講演(原稿は, 後に『日本学刊』1992年第5期に掲載される)を行なっており, 冒頭で土岐善麿の「雪の富士とかすみの万里長城と天地は広く かくも近かりし」「日中抄」『日中文化交流』(第265号)という作を「白雪蒙富士 雲靄罩長城 天地雲遼闊 相逢咫尺程」と漢訳して紹介している。この講演原稿は, 実藤恵秀の訳で「中国における日本文学の研究と紹介」と題して, 『周辺』(第8巻第5号, 1979年12月)に掲載されている。6月17日に李芒が万葉学者の中西

進とともに土岐善麿邸を訪ねたときにこの講演原稿を土岐善麿に手渡し、それを一読した時の感想が「李芒氏を斜面荘に迎えて」『周辺』（第8巻第5号、1979年12月、6～7頁）の中に記されている。「李芒氏の訳は、いかにも自由で、歌の表現のヴァリエティも、よく理解されているらしい。」というのが土岐の評価であった。

李芒が、和歌漢訳を再論した「和歌漢訳問題再議」『日語学習と研究』（1980年第1期）の中に、土岐邸訪問時の二人のやりとりを反映した一節が見られる。前述した李芒の漢訳への肯定的な土岐善麿の評価を引いた後、「这当然是过奖，含有鼓励的意思。不过这里他说明了两个问题，一是和歌表现的内容及其表现方法是多样的；二是翻译也适于根据这特点采取灵活的方法。」と、過褒だとしながらも土岐善麿の言葉には二つの問題が指摘されているとして、一つは和歌の表現手法が多様であること、二つにはそのような和歌の特徴に合わせてその翻訳は柔軟でなければならないとする。さらに漢訳が五言絶句のようなものになっていることは、日本の歌と中国の詩の表現を考えさせることになること、土岐善麿が言及したとして、前引の「白雪蒙富士…」の自訳について触れ、土岐邸を訪問して原歌の創作背景を知らないまま訳出していたことが分かったと明かしている。それは、中日の平和記念の郵便切手を土岐善麿が目にしての作で、長城と富士山を左右に配した図案と、切手の真ん中に刷られた「中日两国人民 世代友好下去」の言葉が、「五言絶句的なものになっていることも、日本の歌と中国の詩の表現を考えさせるもの」なので、土岐自身興味を感じて詠んだものだというのであった。その話を聞かされ、「かくも近かりし」の言葉にこめられた土岐の感慨の深さが、初訳では十分に表現されていなかったとして、李芒は「近在一望中」と改訳している。

李芒にとって土岐との面会は実りのあるものであった。二人の会見については、同席した中西進が「斜面荘を涼風が透きとおる夏日お二人は会見された。李氏が中国語訳された先生の短歌を、先生が微声をもって音読される。それを李氏が彫りの深い温容をもって、じっと見守る。座の、香り高いひびきが私に教えてくれたものは、悠然とし

て国境をこえ、時間を超越した文学の世界であり、先生のかかえている空間の大きさであった」と記している（「雪に刻む」『周辺』第9巻第2号、1980年11月、156頁）。

李芒が日本訪問をきっかけに、『日本歴代和歌選』の準備を始めたことはいくつかの文章から知られる（前引の李芒論文「日本文学研究述懐」などを参照）。その準備のなかで、土岐善麿について「“睦邻反霸理相联”一记日本杰出歌人土岐善麿」『世界文学』（1980年第2期）という論文と「土岐善麿短歌三十三首」『日語学習と研究』（1980年第2期、出来上がったばかりの新作として土岐善麿から贈られた『寿塔 土岐善麿歌集第二』（竹頭社、1979年6月8日）から訳出している、本稿の校正時に土岐善麿の訃報を聞き、東京で面会したときの土岐の「音容笑貌」を思いだし、感慨に堪えないとして、哀悼の念を記している）という翻訳紹介がまとめられている。土岐邸訪問時に、李芒はその元となる草稿を示して、選歌と漢訳が適切かどうか質問している。目を通した土岐善麿は「“诚然！”“原来是这样!”」などと答えたという。原歌の面貌がこの漢訳の通りなのだと土岐善麿が納得して頷いたというのである。「“睦邻反霸理相联”一记日本杰出歌人土岐善麿」は、土岐善麿の歌人としての生涯と思想、また中国との友好について委曲を尽くしてまとめたものである。

「睦邻反霸理相联」は、土岐善麿の前掲『寿塔 土岐善麿歌集第二』「日中抄」に収められた「睦邻反霸 理は相联ると叫びたる こだまよ山によみがえれ」の歌によったものである。李芒は、「睦邻反霸理相联。齐呐喊，回声唤醒万重山。」と訳している。

李芒は説明を加えていないが、「睦邻反霸」の歌には出典があり、「弹指光阴四十年，卢沟晓月将如船，乘风共济待明天。/ 但愿笙歌传四海，莫教烽火再绵延。睦邻反霸理相联。」郭沫若「纪念抗战胜利四十年(浣溪沙)」（浣溪沙は詞牌の一つ）を踏まえたものである（『沫若诗词选』人民文学出版社、1977年9月、423頁（初出は、『人民中国』1977年7月号）、『诗词选』は郭沫若最後の作品となる）。土岐善麿はもう一首「「弹指光阴四十年」と今顧みて「睦邻反霸」の

詩句のきびしき」(前掲『寿塔 土岐善麿歌集第二』「弾指抄」という歌も詠んでいる。土岐善麿と郭沫若の交友については次節に述べるが、善麿は郭沫若の作品を読みながら、日中の交流や、中国のことまたそこで生きる人たちのことを考えていたのである(「日中文化交流協会成立十五周年記念」と題された「漫天飞雪迎春回，岭上梅花映日开。一自高丘传号角，千红万紫进军来。」(前掲『沫若诗词选』，393頁)という郭沫若の七絶を踏まえた「げにまさしく千紅万紫 新たなる平和の春をともに迎えたり」という歌も土岐善麿は詠んでいる、郭沫若自身のこの詩の揮毫を複写して土岐善麿は書斎に飾っていた)。

李芒は1980年の再度の日本滞在の折に、この二つの論文を土岐善麿に届けて、指教を得たいとの希望を持っていたが、同年3月の土岐の死でそれは実現しなかった。李芒は訃報に接し、七絶の連作を作っている(「土岐先生を懐う(小詩十一首)」『周辺』第9巻第2号，1980年11月，48～49頁)。その内の二首を以下に引く。

杜詩読畢慰平生，憤世疾俗一脈承。優国優民
詩聖志，先生三代繼遺風。

この詩では、国を優え民を優えた詩聖杜甫の志を、明治・大正・昭和と杜甫を読みつぎながら土岐善麿が継承していったと詠んでいる。連作の最後は、

巨孽仙遊何処尋，重逢無日意難禁。華章多訳
平生志，常念故人饗国人。

という作である。華章は美しい詩文の意。土岐善麿と再び会うことのできない悲しみを述べ、故人を偲びながら翻訳の仕事に専心していきたくと結んでいる。

土岐善麿の作品の翻訳に関して触れておきたいのは、申非「鑑真和尚 土岐善麿」『世界文学』(1980年第2期)である。申非は日本文学の翻訳者であるが、能と狂言の翻訳がなかでも高い評価を受けていて、『日本狂言选』(人民文学出版社，1980年2月)と『日本謡曲狂言选』(人民文学出版社，1985年5月)の二冊の翻訳がある。謡曲については銭稻孫と劉振瀛の翻訳がわずかにあるだけなので未訳の十八曲の紹介は貴重である。申非の能の翻訳について、自らが翻訳している影響もあり、三分の一が『平家物語』関係の能であることと中国の読

者の理解を考えた選択が行われていると丁曼は評価している(『日本能狂言在中国的译介』学苑出版社，2015年1月，160頁)。土岐善麿の新作能「鑑真和上」は、鑑真和上円寂一千二百年の記念行事のために書かれたものである。申非はまずその経緯を紹介をしてから、能の劇作法を紹介するとともに、作品理解の一助として鑑真の事跡にも触れている。翻訳に付された注解は、詳細なものだが、土岐の「鑑真」『新作能縁起』(光風社書店，1976年6月，184～197頁)に示されている「出典」と安藤更生『鑑真』(吉川弘文館，1978年版)とを参考にしたものである。

申非の訳した「鑑真和上」は、中国において新作能を最初に紹介したものでそれだけに意義がある。申非の翻訳が、自分の一文とともに『世界文学』誌にまもなく掲載される予定だと、2月5日の日付のある書簡で、李芒は土岐善麿に知らせている(「春信—李芒氏の北京だより—」(『周辺』第8巻第5号，1979年12月，8頁)。しかし、善麿自身は印刷された紙面を目にすることはできなかつた。

三

最初の北京訪問から始まる土岐善麿と郭沫若との交流について、亡くなる一年前の94歳の時に刊行された『土岐善麿歌集 第二 寿塔』の「あとがき」で、「すでに老境の生活ではあるが、一九六〇(昭和三五)年の四月、中国との文化交流事業に加わって、文字改革学術視察団一行と共に、はじめて北京に赴いたときから、特に、郭沫若氏そのほか数氏との交情を深め、六四年九月には、建国十五周年国慶節の祝典に参列し、さらに、七三年二月、国交正常化後、また団長として責務を果たしたわけで、老朋友的交歓が、ずっとつづいている。新作能「鑑真和上」の上演、『天の原ふりさけ見れば』にまとめた阿倍仲麿研究のごときも、郭氏が「晁衡来，鑑真往」として、日中文化交流の歴史的意義をうたった詩詞に対応するものであり、「東征抄」，「望郷抄」等は、その一聯をなすものである。」(303～304頁)と、「老朋友的交歓」が続いてきたことを感慨深げに回顧している

（郭沫若の死去は1978年6月）。

文中に出てくる『天の原ふりさけみれば』（蝸牛社、1976年11月）は、書名にもなっている阿部仲麻呂の望郷歌の「契機」を探るとともに、中国の友人たちとの交流も重ねながら描いた作品となっている。阿部仲麻呂の望郷歌の周辺を調べるきっかけとなったのは、1975年10月の楚図南の三度目の土岐邸訪問である。この時の歓談の中で中国と日本の長い文化交流を証明するものだとし、楚図南は阿倍仲麻呂と鑑真を話題に挙げ、それに土岐善麿が共感を感じたのである（前掲『天の原ふりさけみれば』、4～5頁）。楚図南はホイットマン『草葉集』やニーチェ『ツアラトウストラ』などの翻訳もある文学者で、書にも秀でていた。1973年4月の二度目の土岐邸訪問時には日本との交流の深い冰心や詩人の李季も同道していて、その交歓の様子は、土岐善麿の「詩客茶客」『いのちありて』（大法輪閣、1975年6月、91～96頁）に描かれている。『天の原ふりさけみれば』の一冊を土岐に書かせるきっかけとなったのは、楚図南との友情の絆とともに、「鑑真和上円寂一二〇〇年記念行事」のために贈られた郭沫若の「奉賛詞」にも引きつけられるものがあつたからである。郭沫若の「滿江紅 紀念鑑真」は、自筆の書影とともに全文の訳解が、安藤更生・亀井勝一郎編『鑑真和上一円寂一二〇〇年記念』（春秋社、1963年11月、図版24・163頁）に載せられていて、同書には「しお風に しいしおん目を ぬぐうとき / 若葉あかるく さしかわす影よ / 照りわたる道よ」という土岐善麿の「鑑真和上讃歌」も載せられている。郭沫若の「滿江紅、紀念鑑真。」（「滿江紅」は詞牌の一つ）の中の「晁衡來、鑑真往。」の句がなかでも土岐善麿の目に止まったのである。郭沫若の「奉賛詞」は、『天の原ふりさけみれば』の中でも紹介されている。

1964年の土岐善麿の二度目の中国訪問は、日中文化交流協会代表団団長として、一行の副団長白石凡^{ぼん}（朝日新聞論説主幹・日中文化交流協会常任理事）、中川一政（画家、1958年に訪中し「中国遊記」を書いている）、牛原虚彦^{きよひこ}（映画監督、記録映画『新しき大地』の監修をしている）、木村伊兵衛（『木村伊兵衛写真集 中国の旅』などの作品集もある）、

杉村春子（文学座女優）、白土吾夫^{しらとのりお}（日中文化交流協会事務局長）、木村美智子（日中文化交流協会幹事）とともに建国十五周年の国慶節祝典に参列するためのものであつた。

北京で4年ぶりに再会した郭沫若に、土岐善麿は、杜甫に関する色紙をいただければと申し出ている。それに対して、郭沫若からは杜甫と李白とを対比した五絶が贈られてきた。その色紙の書影は、『杜甫周辺記』（春秋社、1967年9月、16～17頁）に載せられているが、詩の内容は土岐との会見時に郭沫若がお互いを杜甫と李白それぞれに重ねながら、杜甫は「リアリスト」で李白は「ロマンチスト」だと話したことと関わるものであつた。旅先のことで郭沫若の真意を十分に確かめることはできないまま、帰国してから、1962年4月に北京で挙行された「杜甫生誕一千二百五十年行事」で郭沫若の行なった開幕の辞「詩歌中的雙子星座」（『光明日報』同年6月9日、後に前掲『杜甫研究論文集 三輯』に巻頭論文として再録）での両詩人への評価を踏まえてのものであつたことが分かる。この論文の結論のところで郭沫若が述べていることは、「今年是杜甫誕生的一千二百五十年週年，也恰巧是李白逝世的一千二百年週年。我們希望在紀念杜甫的同時，我們的心中也紀念着李白。我們要向杜甫學習，也要向李白學習，最好把李白和杜甫結合起來。李白和杜甫的結合，換一句話說：也就現實主義的結合」というものであつたが、土岐は自ら日本語訳した上で、「こうしてこの新しい時代に郭氏が杜甫とともに李白に対していただく景慕の心、それが右の五絶に表現されていることは、はからずも杜甫と一對の紀念になったわけで、まさに韓退之のいわゆる「李杜文章あり、光焰万丈長し」である」（前掲『杜甫周辺記』、20頁）と、感想も付け加えている。

1972年3月、日中友好運動を広げるため、河原崎長十郎演出により郭沫若原作の『屈原』が上演される。それを踏まえて詠んだと思われる土岐善麿の「屈原上演」は、「価値あらば 上演を今もよろこぶと 旧作を旧知の信義にまかす」の一首から始まる（前掲『土岐善麿歌集 第二 寿塔』140～143頁）。連作中から郭沫若や中国への土岐善麿

の思いのよく伝わる歌を引いてみる。

その悲憤を生きて現代に伝えんと『屈原賦今
訳』あり この史書あり

彼はげに中国の一位偉大詩人 同時に思想
家政治家なりき その運命よ

粽を解き 『屈原精義』を読みながら 大陸
の旅の忘れ難しも

郭先生とまた語る日を いつかと待ち つ
ねに相見るとく老いつつ

『屈原精義』は、清の陳本礼の著した屈原賦の
注解であるが、早稲田大学図書館古典籍総合デー
タベースで公開されている土岐文庫中の当該書を見
ると、「ごいっしょに中国に旅する紀念に」と、
原富男による贈呈の墨書が確かめられる。中国思
想家の原富男は、1960年の中国訪問時の同行者で
ある。『屈原賦今訳』（『郭沫若全集 文学編第5巻』
人民文学出版社、1982年10月）は、史劇『屈原』
とともに郭沫若の作。「その運命よ」は、文化大
革命とともに郭沫若が厳しい自己批判を行なった
ことを踏まえているものと思われる（自己批判は、
郭沫若の変節と捉えられ日本ではさまざまな反響
を生んだ、郭沫若の置かれた当時の状況も含めて、
武継平「郭沫若の自己批判の懸案」（『言語文化論
究』第20号、2005年2月）を参照。1978年6月、
郭沫若の訃報に接し、『朝日新聞』に寄せた「草
木には今昔あり、人情には変遷なし」の中で、土
岐善麿は、郭沫若が「常に、「批判」的な方法に
よって現実的に行動した人物だとした上で、「文化
大革命」の複雑な過程、それは「怪奇」ともい
える多難多事な時期であったとおもわれるが、そ
のあいだに処して、まさに「文化戦士」としての
節を守ったことは、これも厳しい「批判の人」で
あったればこそと思われる」と、郭沫若への変わ
らない信頼を書き残している（6月20日付け夕
刊）。

1973年、88歳の時、土岐善麿は日本文化界代
表団団長として北京の三度目の訪問を果たす。こ
の時の一行は、副団長戸板康二（歌舞伎演劇評論
家）、白土吾夫（日中文化交流協会事務局長）、井手
雅人（脚本家）、徳田六郎（エスペラント研究者・N
HK解説委員）、小松久麿（政治評論家）、瀬戸内晴
美（作家）、田中信昭（東京混声合唱団常任指揮者）、

篠弘（歌人）、原信之（日中文化交流協会事務員）であ
る。この時の訪問については土岐善麿の側近くにい
た篠弘の記録がある（「北京の春（一）～（七）」『周
辺』第2巻第3号～第4巻第1号）。高齢になっ
てから再び実現した北京訪問が土岐善麿にとって
特別に感慨の深いものとなったことは上述した通
りである。

最後となるこの訪問で実現した郭沫若との再会
の模様は、長めの引用になるが、土岐善麿の文章
から引くと次のようになる。

北京では、五日の夜、郭沫若・廖承志・胡愈
之、ぼくにとっては旧知の三先生が、人民大
会堂の一室で、一行のために盛大な歓迎宴を
催してくださいました。対外友好協会の楊驥副会
長をはじめ、孫平化、葉籟士、李季、浩然、
李福德、韋建業などの諸氏も同席し、郭先生
の懇切なあいさつをうけて、ぼくが謝辞を述
べたのであるが、この宴席に先だって、
郭先生が特に、団長のぼくを賓館の一室へま
で訪ねて来られたことは、破格の待遇とし
て、まことに恐縮にたえなかった。ぼくは久
しぶりの歓談のさい、記念として携えて行っ
た新刊の『日本金石図録』と近著の『新訳 杜
甫』などを贈呈したのであるが、そこから宴
会場へまで、肩をならべて歩くあいだにも、
ともにいわゆる老健を喜ぶ心の通いあ
ったことは、国交正常化を祝いあう象徴的な
すがたとも見られたのではあるまいか。な
お、翌六日、郭先生からは『毛主席詩詞三十
七首郭沫若書』と題する大冊、『李白与杜甫』
および『考古学報』に、それぞれ署名したの
を届けてくださいました。詩詞の墨書は、いか
にも両者の同志的友情があざやかにうかがわ
れる刊行物であり、『李白与杜甫』は、す
でに架蔵の二部があつて、著者署名のものを重
ね得ることになった。「考古学報」は一九七
二年第一期のもので、巻頭に論文「古代文字
之弁証的發展」が収められてあり、別に人民
中国報道社・外文出版社から贈られた『新中
国出土文物』とあわせて、帰国後の読書の楽
しみがふえたわけである。（前掲『いのちあ
りて』、60～61頁）。

『いのちありて』の口絵の記念写真集の最初に飾られているのは、「郭沫若氏と握手」のキャプションが付けられた一枚で、両者の友誼の深さを感じさせる印象深い写真である。土岐善麿が寄贈を受けた『毛主席詩詞三十七首』は、1965年に人民美術出版社から刊行された郭沫若書のコロタイプ印刷である。郭沫若は郭体といわれるように書家として一家をなしていたが、土岐善麿は前述の『朝日新聞』に寄せた追悼文で恵贈されたこの書から、「暢達俊逸の筆で運ばれるすがたまで眼の前にあるようで、そのすぐれた人格による書格というようなものが感じられる」と感想を述べた上で、「日本では詩人とか書家という専門があるものとされているが、この毛詩詞・郭書をあわせてみるだけでも、その現実性というもうべきものに、この方面の日中の相違が考えられるように思われる」と職業的な専門性とは無関係な、郭沫若の人となりや反映した独自の「書格」について意見を述べている(郭沫若の書法について、日本では書法美学の河内利治「郭沫若書法管見」『郭沫若研究会会報』第12号、2011年3月による分析がある)。

1962年の「詩歌中的双子星座」に対して、1971年の『李白と杜甫』では論調が大きく変わって杜甫へ大変厳しい評価を下した内容であったことは前述したとおりである。郭沫若のこの書は、馮至・蕭滌非・傅庚生に代表される50年代の杜甫研究に見られる強固な伝統的意識への反発や、時局への複雑な反応など、表面的な論調を超えて郭沫若の真意を読み取るのが難しい著作になっている(研究史に、楊勝寛《《李白と杜甫》研究綜述》、《郭沫若学刊》2009年第2期があり、最新の論としては、李斌《郭沫若《李白と杜甫》著述动机发微》、《首都师范大学学报(社会科学版)》2017年第4期があり、詳細な検討が行われている)。

土岐善麿がいつ日本に来られるのかと質問したのに対して、郭沫若は「もちろん行きたいと思っている。わたしの人生経験の四分の一の期間、日本の人民のつくった米をたべていたのですからね」と感慨深げに答えたという(前掲『いのちありて』、70～71頁)。この会見の中で土岐善麿は李白と杜甫への私見を披瀝することはしなかった

が、「求同存異」という周恩来の言葉とともに何かこだわるものを感じていたことは、

時代と人のきびしさよ さらに 著者署名
の『李白と杜甫』を旅に読むとき
という「北京抄」の一首からも読み取ることができる。

土岐善麿に贈った1964年の二枚の色紙について、「いつか書いてあげた二首の詩に関する解釈は、あなたの書かれたとおりです」と、郭沫若は答えたという(前掲『いのちありて』、68～69頁)。郭沫若の「ロマンチズムは、リアリズムの上に立って、そこに社会主義の文芸理念と創作方法を発展させている」というのが土岐善麿の解釈であった。李白と杜甫、二詩人への新しい評価を知った1964年の旅を思いだし、それから過ぎた年月の中で杜甫を読み進めてきた自らを振り返って土岐善麿には深い感慨があったはずである。

参考文献

- 『短歌(土岐善麿追悼特集)』第27巻第6号、1980年6月
『周辺(土岐善麿追悼特集)』第9巻第2号、1980年11月
清水茂太『土岐善麿 人物書誌大系5』日外アソシエーツ、1983年7月
武川忠一『土岐善麿』桜楓社、1980年10月
土岐善麿『土岐善麿歌集』光風社書店、1971年6月
土岐善麿『土岐善麿歌集 第二 寿塔』竹頭社、1979年6月